

瀬戸大橋開通によせて

日本鋼管社顧問

川崎 偉志夫



本四連絡橋に携わり一番衝撃的だったのはオイル・ショックでした。昭和四十八年、起工式の五日前に突

如として計画がストップしたのです。

当時としては大変なことでしたが、

今になって振り返れば、計画をじっくりと再考する良い期間になったと思います。ただがむしゃらに工事するだけではなく、時には考えを深めることも必要だと感じさせられました。

私が本四架橋に関するようになったのは、何

かの運がめぐり合わせたという気がします。

あつたのだと思います。

というのも、戦時中の卒業生は、就職先を自分で選べる境遇にはなく、半ば強制的に決められていたからです。それが結果的には、自分の好きな橋の仕事に就くようになったのです。実際に仕事を始めると、いろいろ困難も出て来ますが、好きな仕事をされたのだから、

また、時流は変化します。例えば、オイル・ショックで工事が延期されたときに、早々とあきらめ、退いた人達もいます。時流に対しては、ある程度鈍くなって、左右されないことが重要だということです。さらに根気、根性も必要です。事業が大きくなればなるほど、解決すべき課題も大きく複雑になるのは当然のことです。

「運・鈍・根」が実を結ぶ

です。

それもまた良い経験になりました。

本四架橋は「運・鈍・根」が揃って働いた

大きな事業を進めてゆく上では「運・鈍・

結果だということが出来ます。

根」が必要だと思えます。科学技術的な裏付けが必要なのは言うまでもありませんが、その時の運がなければ、スタートできません。私が本四架橋の仕事ができたのも、この運が

日韓トンネルは、これまでにない大事業ですから、計画を進める上で、いろんなことが起ると思います。それだけに、一時の風潮に流されず着実に進める必要があると思います。